

林芙美子の旅と “起源本”から学ぶ幸せ

杏 (女優)



かねて「本読み」として、とりわけ「歴史小説好き」として知られてきた杏さん。三人の子どもとともに、パリと東京を行ったり来たりしながら生活している今は、どのような読書をしているのだろうか。一〇代、二〇代の若い頃とは、読んでいる本は変わったのか——。パリ滞在中の杏さんに、本との付き合い方について話を訊いた。

行きつけの老舗書店にて

二〇二二年からパリと東京の二拠点で暮らす杏さん。およそ一万キロ離れた二つの家の本棚から本棚へ、膨大な蔵書とともに往復する生活を送っている。

杏「本棚が二つにばっくり分かれている状態なので、『あの本が読みたいけど、日本に置いてあるんだっとな』とか、『パリに持って行ったままで、こっちはないんだ』となることもしばしばです。読みたいと思った瞬間に読めなくて、ワンクッション挟まることも多いのですが、活字の本はやっぱり紙で読みたいし、持っていたい。日本にはよく帰っているので、帰国時に書店に行ったり、オンラインで注文しておいたものをパリに運んだりしています」

フランスで暮らし、英語の勉強も続けているが、読書はやっぱり日本語で。

杏「集中して読めるし、やっぱり日本語で読めますね。でも、パリでも書店にはよく行きます。フランス語で読み込めるほどの読解力はまだないんですが、店頭に並ぶ本を眺めては、こういう視点で本が書かれているんだ、このテーマが注目されているんだ、と考えをめぐらせるのが楽しいんですよ。日本の本だと、小説もいろいろ翻訳されていますし、マンガにいたってはスパーマーケットで売られているほどたくさん作品が翻訳されて読まれているので、知っている本の書影やデザインの違いを見るのも楽しい。子どもたちの本も買いに行きます」

今回、撮影を行った老舗書店「リブレリ・ジュソーム」(14ページ)も杏さんの行きつけの一軒だ。

杏「パリのパサージュ(ガラスのアーケードに覆われた商店街)が大好きで、暮らし始める前からたびたび訪れています。この店では本も見ますが、絵葉書を買うことのほうが多いかな」

三月に刊行されるエッセイ集『杏のとことこパリ子連れ旅』で、『床のモザイクタイルも、天井のガラスも時が止まったかのように美しい』(雨なのでパサージュに行ってみよう)より引

用)と杏さんが評した、パリ二区に位置するパサージュ「ギャルリ・ヴィヴィエヌヌ」。その一角で一八二六年に開業し、一九世紀末に「リブレリ・プティ・シロ」から現在の名称に変わったこの店には、古典から現代までのさまざまな詩や小説、美術書、画集、版画やポストカードなどが並んでいる。

そんな場所での撮影時、杏さんがお気に入りの本として持ってきてくれたのは林芙美子著『下駄で歩いた巴里』。NHK Eテレで放送された『J'ブングク』に出演していた二〇代半ば、自身がパリで暮らすとは想像もしていなかった時期に出合った思い出深い紀行集だ。

杏「林芙美子がパリにやってきたのが昭和六年



杏さんの新著『杏のとことこパリ子連れ旅』(ポプラ社)と『杏のパリ細うで繁盛記』(新潮社)は3月18日に同時発売。

撮影=新村真理 スタイルング=鈴木ひろこ
ヘア&メイク=御幸 剛 インタビュー・文=鳥澤 光